

教える「現場」

育てる「言葉」

5

「他者への想像力」が 調律師の感性を 豊かにする

泥まみれになってつかみ取る調律師のセンス

ピアノ調律師 村上輝久

ピアノ調律師。1929年生まれ。
48年、ヤマハ株式会社（当時日本楽器製造株式会社）に入社。
66年から70年まで、ヨーロッパに調律の研究に出かけ、
ミケランジェリをはじめ、リヒテル、シフラたち
巨匠の専属調律師として、世界26か国を回る。
帰国後の80年、ヤマハピアノテクニカルアカデミーを設立、
初代所長に就任。
現在は内外の一流ピアニストの演奏会での調律、
大学の講座、テレビ出演などで活躍中。
著書に『ピアニストと語る』（芸術現代社）、
『いい音ってなんだろう』（ショパン）など。

【ピアノ調律】

現在、日本には1万人ほどのピアノ調律師がいるとされる。
このうち（社）日本ピアノ調律師協会に
加盟しているのが約3000人。
かつては徒弟制度のように、
親方の家に住み込んで技術を学ぶケースが多かったが、
現在では専門の養成機関が整備されている。
ヤマハピアノテクニカルアカデミーのような
企業設立のものが3か所あり、
他は音楽大学と音楽専門学校が調律コースを設けている。
調律師は、メーカー所属、楽器店に勤務、フリーなどさまざま。
近年、少子化の影響などで、新しくピアノを購入する家が減っており、
調律師の数も減少しているのが実態だ。

と場所と時代、それぞれの要素がうまく複合して出る
人「いい音」を求め続けて半世紀。村上輝久さんは巨匠の
下で修行を重ね、本場ヨーロッパで一流調律師として認められ
た。その後、調律師の学校を設立し、日本の調律技術の向上に
尽力してきた村上さんは、後進の人たちに何を伝えようとして
いるのだろうか？

調律という仕事に不可欠な「他者への想像力」

浜松市の郊外、木立に囲まれた一面にヤマハピアノテクニカルアカデミーがある。ピアノ調律の専門技術者を育てるアカデミーが設立されたのが1980年。学校の場所探しから校舎設計、教科書やカリキュラムづくり、講師の人選と村上さんはその発足に深く関わり、初代所長を務めた。

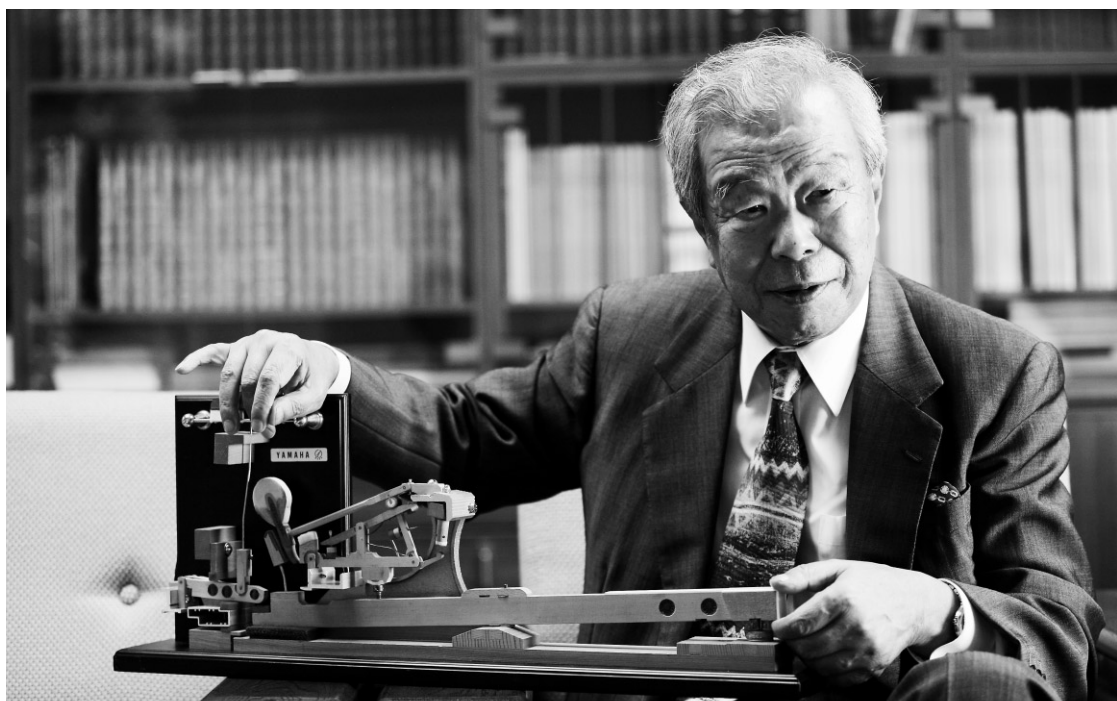
「私の夢だった」と語るように、アカデミーには人生の多くを調律の仕事に賭け、世界的なマエストロと触れ合ってきた村上さんの思いのすべてが注ぎ込まれた。現在、新規養成総合コースと実務経験者のためのレベルアップコースがあり、総合コースには全寮制で30人程の若者が在籍する。

2年前にアカデミーを離れるまで、村上さんが後進たちに伝えてきたのは「他者への想像力」である。

「通常、調律はピアノの音程を合わせることを考えられています。しかし、それだけではない。コンサートの前、張り詰めた緊張感の中で、ピアニストが何を考えているのか、どういう音を欲しがっているのかを判断して“音づくり”の作業プログラムを組み立てていく。大事なものは、ピアニストと言葉を交わし、その端々から相手の心の中を想像し、彼らが求める音を冷静に具現化する能力です」

幅広い音域と豊かな表現力から「楽器の王様」と呼ばれるピアノは、約8000ある部品に木材や羊毛、皮革など天然素材をふんだんに使った自然楽器でもある。ただ、天然素材を取り入れた楽器の宿命で、音程の狂いやタッチの変化は避けられない。これを修正するのが音程・音階を合わせる「調律」、タッチを整える「整調」、音色・音量全体のバランスを整える「整音」の三つの作業で、調律師を目指す人はこの技術を徹底的に叩き込まれる。

アカデミーでも基礎技術の習得に多くの時間を割いているが、これに加え調律師に不可欠な要素として、村上さんが挙げるのが「人間を読む力」である。



断面模型を使いながら調律について説明する村上さん

「調律師は音に信念を持たないといけない。しかし、その音はピアニストの心理を読み、その日の演奏曲、コンサートホールの状態などあらゆる条件を勘案する必要がある。ピアニストがピアノに向かう姿勢、椅子の高さによっても、その場での“最良の音”は違ってきます」

調律とは手工業的・名人芸的・芸術的な作業だ。0.1mmから10mmという狭い範囲内で部品を調整し、音を生み出す。調律師は「職人」であるべきだが、昔風の頑固な職人ではない。柔軟なバランス感覚、複眼的な視点が重要で、問われるのは本人の人間性なのである。

体験こそが「人間を読むセンス」を養う

村上さんについて語られる言葉に「すべてのピアノをストラディバリウスに変える東洋の魔術師」がある。

67年9月、フランスはコートダジュールでのマントン音楽祭に公式調律師として招かれた時のこと。音楽祭には、リヒテル、バイロン・ジャニス、ケンプ、ギレリスといったそうそうたるピアノの巨匠が顔を揃えていたが、ドイツの著名な音楽記者が「本当の主演は舞台裏にいた。その名前はテルヒサ・ムラカミ……」と記事にしたのである。

「私は天才でもマジシャンでもない。調律という仕事はもつと地味で堅実なものです。調律師に必要とされるセンスも同

じこと。何かに打ち込んで、泥だらけになる。そこからピカッと光るものを見つけ出す。センスとはそういうものです」

村上さん風の表現を借りるならば、このセンスは「人間を読むセンス」ということになる。村上さん自身、現場での経験を重ねることで「調律とは何たるか」を体で覚えてきた。

旧国鉄の鉄道マンからヤマハに転じたのが、戦後間もない48年、19歳の時である。子どものころ、自宅でピアノの調律作業を見たことが、人生を決めた。「調律師がちょっとネジをゆるめ、どこかに触っただけでたちまち音が変わっていく。工作好きだった私にとって、その光景は興味深く、新鮮な驚きでした」。

最初は工場でピアノを作りながら、調律技術のいろはを身に付けた。汗まみれになってピアノの音色をつくり出すメカニズムを知り、倍音（基音の整数倍の振動数を持つ音）を正確に聞き分ける。これは理論ではない。ギリギリまで自分を追い込んで音を追求するという姿勢が必要なのだ。ひと通り技術を習得し、調律師として活動を始めてからは、安川加壽子さんや園田高弘さんといった当代一流の大御所の演奏旅行に同行し、現場での体験を通して「調律師のセンス」に磨きをかけていった。

「肝心なのは忍耐と好奇心」と村上さんは話す。「すべてのピアノをストラディバリウスに変える」には「泥まみれの時

間」の蓄積があるのだ。後進であるアカデミーの生徒たちがこのことを理解するのはずっと先のこともかもしれない。村上さんは「知識だけでは得られないものが後々、調律という仕事の糧になる」と、語りかけてきた。

村上さんが、世界の檜舞台で調律師の腕を振るようになったのは、66年、37歳の時に単身イタリアに渡ってからだ。ヤマハで、国際的に通用するコンサート・グランドピアノを作る計画がスタートし、「本場の音」を学ぶために送り込まれた。派遣先は、奇才といわれたイタリアのピアニスト、ベネデッティ・ミケランジェリの専属調律師、アウグスト・タローネの工房である。以来、4年間、ミケランジェリやりヒテル、シフラといった巨匠と行動を共にし、世界各地の演奏会で厳しい「音への注文」に答えてきた。

ある時、イタリアの放送局でミケランジェリの演奏会が開かれた。「スタッフが『なぜ、日本人を連れてくるのか?』と質問すると、ミケランジェリは『彼は邪魔にならないから』と答えたのです。すぐにはその意味が理解できませんでした。でもよく考えると、調律師にとって『邪魔にならない』というのは素晴らしいこと。調律師はピアニストの邪魔になってはいけないのです」。ピアニストが「こんな音が欲しい」と思ったら、いつでも現れて素早く希望に応える。普段は目立たなくても、常に先を読んで力になる。調律師には、このあたりの“呼吸”が大事になる。

一流のピアニストは、音に対し独特の感覚を持つ。渡欧したばかりのころ、あるピアニストに「ドルチェの音」を要求された。ドルチェはイタリア語で「甘い」の意味。これを「柔かい音」と解釈した村上さんは、鍵盤の沈み具合などを調整して音色を少しソフトにした。だがピアニストは「この音ではない」といい、皿にケーキを載せて戻ってきた。音を味覚で表現したのだ。彼が求めたのは「イタリアの菓子に特有のコッテリした甘さの音」——ブリリアントだけれども硬質ではない音——だった。

「独特の言い回しを的確に受け止めるには、こちらにもそれだけ表現力の土壌が必要です」

“ブリリアントで硬質ではない音”をピアノから引き出すには、高度な調律技術が前提になる。同時に調律師はさまざまな場面で、自分が試されていることを知らなければならない。アカデミーの生徒たちをはじめ、後進の育成に際し、村上さんが強調してきたのもこのことだった。

自ら体得した財産を後世につなぐために

現在、村上さんが力を入れているのが、ピアノレクチャーコンサートである。全国を回り、ピアノの先生や、若い調律師、音楽愛好家にピアノの魅力、歴史、作品などについて話している。「教えるのは難しい」といつつも「年齢は関係ない。皆、仲間です」と楽しんでいる。

家庭でのピアノの調律であれコンサートチューナーであれ、「臨機応変に動ける技術にプラスして自分を豊かにすることが基本です」と村上さんは改めて指摘する。それまでの調律学校が技術中心のカリキュラムとなっていたのに対して、アカデミーは設立当初から「全人教育」を理想とし、外部から一流の特別講師たちを招聘。技術教育だけでなく、音楽芸術論や音楽美学、一般教養など音楽に関わる周辺知識の授業に力を入れてきた。調律師に不可欠な「人間を読むセンス」を養うための素地を個々の生徒の内面につくるためだ。これは、長年、調律師として国際的に活動し、調律師に必要な素養を体得してきた村上さんの経験を踏まえている。

「日本の調律技術は今や世界にひけを取りません。ただ、ヨーロッパの人たちは、クラシック音楽を肌で知っている。この差を埋めていくには、技術だけにとどまらず、知識や表現力など幅広い領域におけるたゆまない努力が大切です」

手軽に手に入るものは手軽に扱われる。「“いい音”は自分だけのものではない」という村上さんが、後進に知ってほしいのは、「自分で何かを生み出す力は、泥まみれになってようやく獲得するものである」ということなのだ。

